

とは、ビデオカメラを持っていてる関係上、不可能だと判断し、その時は砂場からおよそ一メートルほど離れて撮影を行ないながら、同時に砂場での彼らのやり取りを眺めていた。曇り空の天候のせいかもしれないが、時間が緩やかに、あまりにも緩やかに過ぎていくように感じられた。砂場の中に、彼らは山や谷やトンネル等をつくっていた。突然Ｙくんがイライラした声を発しながら、Ｔくんの足に砂をかぶせるのを見た。ＴくんはＹくんを叩いたように見えた。Ｙくんは反撃をしようとしたが、結局はやめたようだった。Ｔくんはそのまま砂場を後にした。ＹくんとＮくんが、ビデオのレンズを土まみれの手で触ろうとした。私は触れないように注意していた。すると、「だめー」とＪくんが大声で言っているのを耳にした。ＴくんがＳくんを押しつぶすように見えた。突然、Ｓくんが大泣きした。すると、すぐにＫくんが走ってきて、Ｔくんにキックした。あまりの早い展開と、３人が入り乱れた状況に、その場で何が生じていたのが、一瞬に理解することは難しかった。その後、Ｓくんの大きな泣き声に引き寄せられるように、他の園児たちが集まってきた。隣のクラスの担任の〇先生がやって来た。先生は、二人によるケンカと判断されたのが、二人ともお互いに謝るようにおっしゃったようだった。

それにしても不思議だった。ＴくんとＪくんととの間に何らかのいざこざがあった様子だが、なぜＳくんが大泣きをしたのか。さらには、まったくの第三者とも思えるＫくんが、なぜ走って来て、Ｔくんをキックしたのか。このトラブルの全容について、私には妥当な説明が瞬時に浮かぶことはなかった。このトラブルは不思議な「出来事」として、ずっと心の中に残り続けた。

現場において私たちは一体何を見ているのだろうか。いくらフィールドワーカーと言えども、常に目を皿のようにして自らの周囲三六〇度全体を一年三六五日もの間、一秒も休みなく見渡し続けているわけではない。たとえその現場に

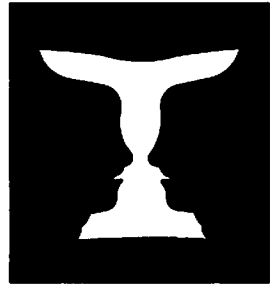


図4-1 ルビンの盃

ずっと居合わせていたとしても、何が自らの目の前で繰り広げられていたのかを説明することは、困難である場合が大半なのではないだろうか。ここから言えることは、フィールドワーカーが現場に「いる」あるいは「いた」からといって、そのことが担保となり、そのフィールドワーカーたちのエスノグラフィ等を保証するか否かは別問題であるということである。さらに言えば、「ルビンの盃」といった多義図形が示すように、たとえ同じモノを見ようとも、見る者によって、その見え方は異なることがある（図4-1参照）。ましてや操作された二次元の図版ではなく、きわめて流動的な人間同士のやりとりである。そこには始まりと終わりさえも不確かである。見る者の視点によって、その見え方はかなり異なってくるのではないだろうか。そこには、見る者のこれまでの体験や経験の違いが如実に反映されているのではないだろうか。まるで芥川龍之介の短編小説「藪の中」のように、一人ひとりによって、一つの「出来事」として理解された内容と説明のされ方は異なるのだろうか（それぞれの思いを秘めながら）。

筆者は当初、この幼児同士のやりとりから、この「出来事」を「排除の物語」に当てはめて理解しようとしていたように思われる。Tくんはやや発達の遅れがあると両親が非常に心配している子どもであった。教室内で一人歩き回ったり、自分勝手と映る行動をしてみまいがちであった。「Kは精神病だ」という衝撃的なタイトルの論文に非常に似通った「出来事」であり（Smith 1978）、Tくんを一種の「悪者」に仕立てることによって、クラスのメンバー、少なくともクラスの男児たちが自分たちは「仲良し」であるという状況を生み出すということを意図せずに結果的に行なっているのではないかという考えが、当時の筆者の頭に一瞬よぎった。それは、エスノメソドロジに傾倒し、しかもそれは「エスノメソドロジストのためのエスノメソドロジ」ではなく、集団からの排除のプロセスをエスノメソドロジという手法に寄りかかって解き明かし、「共生」へのベクトルへととらえ返そうとしていた当時の筆者の発想そのものであったと、へいまんの筆者からは言える。さらに言えば、エスノメソドロジが誕生した時点で秘めていた衝撃力の一つ

の運動としてとらえることによって生み出され続けていた好井論文の数々に影響を受けていた当時の筆者の発想であったとも言える。⁽⁶⁾ 幼児同士のやりとりをこのように理解しようとしてしまった筆者は責められるべきかもしれない。つまり、マリア幼稚園の生活世界を理解するために幼稚園内に入らせていただいたにもかかわらず、外部から持ち込んだ、しかも筆者が傾倒している「ものの見方」によって、現象を切り取ろうとしていたからである。フィールドに分け入っていても、まさに内在的な理解とは程遠い、外在的な理解を筆者は行なおうとしていたのかもしれない。このような理解が結論として先に保持されているのならば、わざわざフィールドに出かける意味はないであろう。

筆者のモノローグを先に示したが、その後に録画された映像を丹念に見ていくと、当初筆者が自論んでいた「排除の物語」に沿った説明はできなくなった。映し出された映像を改めて見て、筆者は驚いたことを覚えている。自分自身がいかに目の前の状況を見ていなかったのかを痛感させられたからだ。しかも、筆者はフィールドワーカーであるとともに、マリア幼稚園では補助教員の役割も担っていた。教員の役割を担っていた者として、園児たちの動きをほとんど見ていないことに驚かされたとともに、かなりのショックを受けた。

録音・録画された〈出来事〉

録画された映像を丹念に見つめていくことにより、幼児同士のやりとりは本節のように記述することもできる。表4-1-2は録音・録画されたデータを文字化したトランスクリプトである。⁽⁷⁾ 本章では、きわめて機械的に、30秒ごとに区切って記述していく。ただし、この時間は、ビデオテープに記録された、その当時の小型ビデオカメラが刻んだ時刻であり、外部の世界における時刻と正確に一致しているかどうかはわからない。

主題となる〈出来事〉が生じた砂場は、マリア幼稚園から歩いて数分の場所に位置する公園の中にある(図4-1-2参照)。図4-1-3に示すように、砂場は直径がおよそ5メートルの円である。面積はおよそ20平方メートルである。撮影当時の砂場における園児たちの位置関係をおなじく図4-1-3に示した。概略を述べると、①のエリアにはα組の隣のクラ

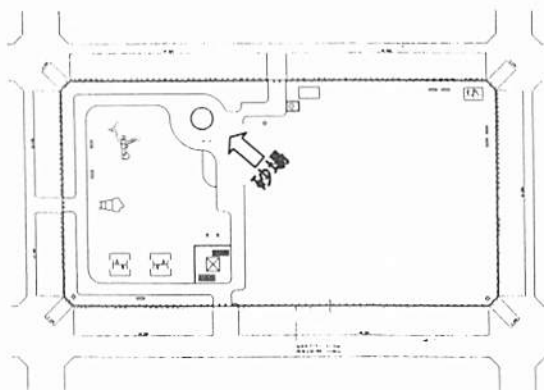


図4-2 公園の全体図

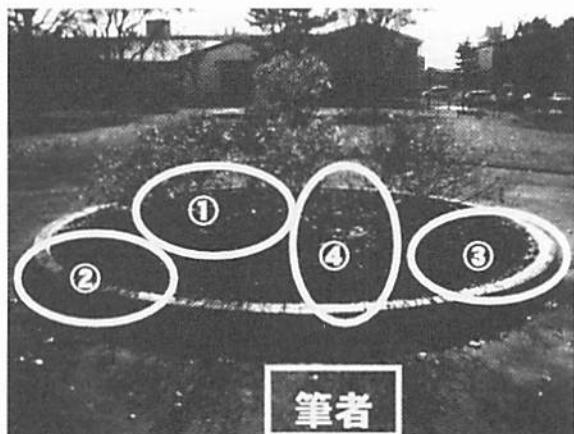


図4-3 砂場における園児たちの当時の位置関係

図4-3の画像は、2003年現在の砂場の姿である。ご覧の通り、砂場は縁一杯まで黒土で埋められ、誰も立ち入れないように種々の小木が何本も植えられている。この公園のある町の老人会のメンバーによると、砂場に猫が糞をして困るという苦情が相次ぎ、老人会のメンバーが様々な策を講じたが、結局、猫の糞による被害はなくならなかったために、2003年から木々を植えたということであった。この地域の公立公園内の砂場は猫の糞を原因とする苦情のために、次々と消え去る一方である。たしかに画像のように、小木が植えられているが、この公園は砂場が取り壊されていない珍しいケースであった。

スの男児数名がいて、α組の男児がのべ2名参加していた。②のエリアでは、本章の記述の主要メンバーとも言えるSくん、Tくん、そしてJくん(全員がα組の男児)が白いプラスチック容器を用いて遊んでいた。③のエリアでは、Kくんをはじめとして、α組の男児たち5、6名が土を盛り上げたり、穴を掘るなどの作業を続けていた。この③のエリアにいた男児の大半は、同じ企業の社宅に住み、降園後も一緒に遊ぶメンバーだった。④のエリアには、奥側ではHくん一人が黙々と土で何かをつくっており、手前のほうではYくんが穴を掘ったりしていた。表4-2では、どのエリアで生じたやりとりなのか、どのエリアで話された音声なのかをできる限り明確にさせた。

表4-2のように、ビデオカメラが刻印した11時33分に生じた、一人の男児が泣くという行動の前後数分間を、機械的に30秒間ごとに区切って記述した。

表4-2 園児たちの言動

時間	場 所				その他
	①	②	③	④	
11:27 :00~	α組の男児を一人含む、5人で黙々と穴を掘っている。		Kくん「もう許さな ー」 Kくん「絶対(聞き取	Tくんが砂場に入って来た。砂場の中央部を歩いていく。高く積み上げられ固められた土の山などを踏んでしまう。 Hくん「ふんだー、あ ーふんだー」 Yくん「あー」 Hくん「ふんだー」	

11:27 :00~			れず)、もう許さねー」	Mくんの背後で、KくんがTくんを蹴っているようにも見える。 Kくん「えー、Tくん、やってないよー」 Kくん「Tちゃん。砂かけるよー」 Tくん「やだあ」	Mくんが滑り台について筆者に話しかけてくる。Mくんが画面一杯に映る。音声も、Mくんの声しか聞こえなくなる。
11:27 :30~				Tくん「やだー砂かけないでー」 KくんがTくんに砂をかけている。 Tくん「やだー」 Kくん「じゃー(聞き取れず)出ていってー」 二人のすぐ側で、Yくんが「おー、おれ自分で踏んじゃった」と二人を茶化すような仕草をしている。 Yくん「ねえ、〇〇〇	

<p>11:27 :30~</p>		<p>」くん、Tくん、Sくんの三人が砂場の縁に腰掛けている。 Sくん「Tちゃん、これこわさないでね」 Tくん「わかった」 」くん「(聞き取れず)」</p>	<p>Kくん「ほくたち、お家つくってるからー」(大声で) Kくん「Sちゃん、Sちゃん、ほくたちお家つくってるからー」(大声で)</p>	<p>〇くん、おれ自分で踏んじやった(語尾上げる)。(注:〇〇〇〇はKくんの正しい名前) Tくんが急に立ち上がる。</p>	
<p>11:28 :00~</p>	<p>Mくんが棒で土を跳ね上げている。</p>	<p>Sくん「ほくねー、やり方知ってる。誰かにやり方、教えてあげろ」(立ちあがりながら) Sくんが白いプラスチック容器に土を詰め込みながら、」くんと二人で笑顔で話している。 Tくんは、筆者をちらちら見ながら、笑いながら、靴を脱ぎ、次に靴下を脱ぎ始めた。 Tくん「おれ、裸足になろ、裸足に」</p>		<p>Hくん「誰か砂かけたー」</p>	
<p>11:28 :30~</p>		<p>裸足になって嬉しそうな表情をしているTく</p>			

<p>11:28 :30~</p>		<p>んの右手が、砂場の縁に置かれていた、白いプラスチック容器で形作られたプリンのような形に固められた土を潰してしまう。その瞬間、すまなそうな表情をするTくん。 Tくん「あっ、つぶれちゃった。……ごめん、ごめんなさい」(小声で) Sくんが見にやって来た。Jくんは驚いた表情をしている。 Sくんは確認しただけで戻っていった。後ろ向きなので、表情はわからない。 Jくんが笑う。Tくんも一緒に笑った。</p> <p>Tくん「はだしー、おれは裸足になったんだー」</p> <p>Sくん「やったげる」 一心に土をプラスチック容器に詰め込もうとするJくん。 Jくん「あれ」 Sくん「やったげる」</p>	<p>Kくん「裸足ダメー、 ○○○○ちゃん」 (注:○○○○はTくんの正しい名前)</p>		<p>?「あっ、○○○○ちゃん裸足だ」(注:○○○○はTくんの正しい名前)</p>
-----------------------	--	---	---	--	---

<p>11:29 :00~</p>		<p>Jくんは、Sくんにプラスチック容器を貸す。Sくんはその容器に土を詰め込んでいる。</p> <p>Tくん「おれは裸足になったー、はだしー」</p> <p>Kくんがやって来て、Tくんに靴下を履かせようとする。何度も靴下を履かせようとする。</p>			<p>?「あー」 ?「おらのー」</p> <p>?「そうじゃないよー」</p>
<p>11:29 :30~</p>		<p>この間に、Tくんがプラスチック容器を手に入れる。</p> <p>Jくん「これがプリン。これメニュー、メニュー。これはー」</p> <p>Tくん「いやー」</p> <p>Jくん「これが普通のプリン」</p>		<p>YくんがTくんに土をかける。</p> <p>YくんがTくんに土をかける。</p>	<p>α組の女兒が筆者のもとに来て、衣類を預かっておくように無言で促す。しかし、筆者はそれを地面に落としてしまい、「あーごめん」と謝る。</p>
<p>11:30 :00~</p>		<p>Tくんがプラスチック容器に土を入れている。</p> <p>Yくん「じゃあ、入れ</p>			

<p>11:30 :00~</p>		<p>たげる」 Yくん「うー、うっうー」(大声で)</p> <p>YくんがTくんの足に土をかぶせる。 Tくんは笑っている。</p> <p>Yくん「(聞き取れず)てー」</p> <p>Jくん「因まりが(聞き取れず)」</p> <p>Sくん「何でー」</p> <p>Yくんが再び、高い声を発しながら、Tくんの足に土をかぶせる。 Tくんが右手でYくんの頭を押しやる。さらに左頬も押しやる。 Yくんは反撃する素振りを見せるが、行わなかった。 Yくんはそのまま土をかけ続けている。 Tくんは笑っている。</p>	<p>Kくん「ちょっとー、ちょっとSちゃん、これやまにしてー」(大声で)</p>		
<p>11:30 :30~</p>		<p>Yくんは立ちあがりながら「Eちゃん、聞いてー」Tちゃん「(聞き取れず)」</p>	<p>Hくん「○○○○○○ちゃんやめたんだって</p>		

11:30 :30~			-」(注:○○○○○ ○はAちゃんのフルネ ーム)		
11:31 :00~		Tくんは白いプラスチ ック容器を手にしてい る。そして、裸足のま ま、砂場の外に出る。 靴が取り残されている。	Yくんが突然立ち上が り「ねえ見せてー」		?「これ、おらの川だ からー」 砂場の園児たちがざわ ざわと、砂場の外に出 ていく。誰かが、「大 当たり」と書かれた何 かを拾った様子。口々 に「見せてー」
11:31 :30~					Yくん「ねえ見せて ー」 砂場に戻ってきたYく んとNくんがビデオカ メラのレンズに、土の ついた手で触れようと する。触れてはいけな いと注意する筆者との 攻防戦が展開される。 その間、砂場で何が生 じているのかが見えな い。
11:32 :00~					Yくん「ねえ、ちょっ と貸して」(甘えた声 で) 筆者「ダメダメ」

<p>11:32 :00~</p>					<p>Yくん「んっんっんっ」 Yくん「Nくん、やめてー」(大声で) 筆者「土のついた手で触っちゃダメだー」 Yくん「ううん」 画面一杯に土だらけの手が映し出される。 筆者「うっそー」 二人はカメラから離れる。</p>
<p>11:32 :30~</p>		<p>Tくんは先ほどまでいた砂場の縁に座っていた。隣に座っているJくんは、不服そうな表情をしながら、Tくんが先の容器で遊ぶ姿を見ている。</p> <p>Jくん「あと一回」 Jくん「だめー」 Tくんがプラスチック容器を動かしながら「これ、おれの(聞き取れず)」 Jくんが「だめー、だめー」と大声を出して、こちらを見る。</p> <p>Sくんが小枝を持ちながら、Tくんの前へやって来た。</p>	<p>Kくん「ちょっとー、ここにもホテルあるのねー」(大声で)</p>	<p>Hくん「宮内センセー」</p>	

<p>11:33 :00~</p>		<p>Jくん「いやー、まだー」 Sくん「ずるー、もうダメー」 Sくん「もう、よしなー (聞き取れず)」 Tくん「いやだ」(小声で)</p> <p>Sくんは、プラスチック容器を使い続けるTくんの目の前に左足を少し出した。 Tくんは突然立ち上がり、Sくんの両足太股を両手で強くつかんだ。</p> <p>Sくんは大きな声で泣き始めた。</p> <p>Tくんが一瞬筆者の方を見た。</p> <p>Kくんが走ってきて、Tくんの右脇腹辺りを</p>	<p>Kくん「Sちゃん、Sちゃん、ここにもホテルあるのねー」(大声で)</p> <p>Kくん「あっそうだー、町とかホテルとかつころう」(大声で)</p>		
-----------------------	--	--	--	--	--

11:33 :00~		無言で右足で思い切り蹴る。			
11:33 :30~		<p>Nくんがやって来る。砂場の縁にあったプリンのかたちに固められた土を踏んでいる。それを踏み続けながら、Tくんの近くに座る。KくんがTくんの背中をもう一発蹴る。</p> <p>Tくん「ごめんねー」 Sくん「許さない」 (泣きながら、大声で)</p> <p>KくんがTくんの背中を蹴り続ける。</p> <p>「ごめんねー」と言いながら、TくんはSくんの頬を両手で挟む。</p> <p>Sくん「許さない」 (泣きながら、大声で)</p> <p>KくんがTくんの背中を思い切り蹴る。</p> <p>Tくん「ちょー、けんないでー」(大声で) Sくん「いたーい」 (泣きながら、大声で) Tくん「ごめんねー」</p>			

<p>11:33 :30~</p>		<p>Nくんが走って、その場から立ち去る。</p> <p>Kくん「Tちゃん、やり返しても良いんだよ」 Tくん「謝ってるんだよー」</p>			
<p>11:34 :00~</p>		<p>Kくん「Tちゃん、やり返しても良いんだよ」(注:Tくんの名前を長くのばして発音しながら) Tくん「いやだよ」(小声で) Kくん「じゃあ、(聞き取れず)」(ずっと、Tくんの左肩を軽く蹴り続けながら)</p> <p>女兒が一人近寄ってくる。「どしたの」</p> <p>この間、白いプラスチック容器は土の上に置かれたまま。 KくんがTくんを蹴り続ける。</p> <p>Tくん「○○○○ちゃん、ごめんねー」と謝り続ける(注:○○○はSくんのフルネー</p>			

<p>11:34 :00~</p>		<p>ムが変形した呼称)。 Nくんが再び現れる。 Tくんは再び、Sくんの頬を両手で挟みながら、「ごめんねー」と謝る。 Tくん「○○○○ちゃん、ごめんね」(大声で)(注:○○○○はSくんのフルネームが変形した呼称) 様々な園児たちが集まってくる。「どうしたの」</p>			<p>?「ねえ、どうしたの。○○○○ちゃん、どうしたの」(注:○○○○はSくんのフルネームが変形した呼称) 筆者「二人でケンカしちゃったの」 ?「何やったのか聞かして」 筆者「ん」</p>
<p>11:34 :30~</p>		<p>O先生がやって来る。 O先生「○○○怪物ですか」(注:○○○はSくんの名字) Tくん「○○○○ちゃんが、ぼくのつくった(聞き取れず)こわしたんだよ、○○○ち</p>			

11:34 :30~		<p>ゃんが」(大声で) (注:○○○○はSくんのフルネームが変形した呼称)</p> <p>右足でTくんを蹴り続けるKくん。</p> <p>O先生「それで、○○○○ちゃんが怪物になっちゃったの」(注:○○○○はSくんのフルネームが変形した呼称)</p> <p>Sくん「ちがうー、あのちょっと、触っただけなのにねー」</p> <p>O先生「はい」</p> <p>Sくん「(聞き取れず)」</p> <p>Tちゃんがねー (聞き取れず)」</p> <p>O先生「まだ痛いの」</p>			
11:35 :00~		<p>Tくん「ごめんねーって謝ってんのにー」</p> <p>O先生「しんちゃん(聞き取れず)」</p> <p>Tくん「ちゃんと謝ったのにねー、やだーって言ったんだよ」(大声で)</p> <p>Kくんは、Tくんの頭を後ろから両手で押し</p>		後ろを振り向き、Kく	

11:35 :00~		ている。 Sくんは白いプラスチック容器をすばやくつかみ取り、③へ移動した。	Sくんはもう泣いてはおらず、プラスチック容器で土を固めている。	ん「あーーーー」(大声で) 他のクラスの男子が何かを踏んだらしい。 Kくん「あ-----」(大声で)	
11:35 :30~		TくんはO先生の隣で小さな声で話している。	O先生は、「いつまで泣いてるの。仲直りしたの、Sちゃん」と言いながら、Sくんのところに行った。		
11:36 :00~		Tくん「○○○○ちゃんに「ごめんね」と言ったのに、謝ってくれなかった」(注:○○○○はSくんのフルネームが変形した呼称) O先生に促されて、SくんはゆっくりとTくんの隣へ行く。 Tくんは穴を掘り続けている。	O先生「Sちゃん、仲直りしたの？」 O先生「Tちゃんと話してごらん」		

<p>11:36 :30~</p>		<p>Sくん「あー」 (③の方を見ながら) TくんはSくんの方を見た。</p> <p>Sくんは、Tくんのやや右後方に立ちながら、もじもじしている。Tシャツの裾を持ち上げて、お腹を丸出しにしながら、くねくねと身体を揺らしている。</p> <p>Sくん「なに? (聞き取れず)」 Sくん「してないよー」 Tくん「したよー」 Sくん「ちがうよ。したのは、Kくんだよ」 Tくん「ちがうよ。Fちゃんだよ」 Sくん「ほんと?」 Tくん「Fちゃん (聞き取れず)」</p>	<p>Kくん「ほくやっぺないよー」(大声で)</p>		<p>O先生は、女児たちに連れられて、砂場から離れていった。</p>
<p>11:37 :00~</p>					<p>?「あたりー」</p> <p>多くの園児たちが同じ様なトーンで話しており、焦点化できなくて、聞き取れない。</p>
<p>11:37 :30~</p>		<p>Tくん「○○ちゃんがいじめたんだよーほ</p>	<p>Kくん「ほく、やっぺな」</p>		

11:37 :30~		くを」(大井で) (注: ○○○はKくんの名 字) Tくん「誰かー」	Kくん「ごめんねー、 ごめんねー」 Sくんは、Tくんから 隠れて、プラスチック 容器で遊ぶ。		
---------------	--	---	--	--	--

まず、筆者は録画された映像を見直して改めて驚いた。このわずか数分間にも多くにやとりが生じていたからだ。小型ビデオカメラのレンズとは別に、肉眼でとらえていた「出来事」は前節で記した通りであるが、それはあまりにも単純化されているとともに、そして多くの行動がまるでざるの目から水がこぼれ落ちるように筆者の目と耳を通り過ぎていたことがわかる。表4-2の通り、記述の多いセルと記述の少ないセルが生じている。子どもたちの実際の行動に対する記述者自身の認知できる能力と記述する能力に委ねられる部分も大きいだろうが、各々の時間によって子どもたちの行動に「濃淡」があることも否定できない。園児たちの目立った動きがほとんどなく、穏やかに時間が過ぎていくとみなされる箇所もあれば、短時間のうちに様々な行動が一挙に飛び出してきた、事態が急展開する箇所もある。急展開するような場面において瞬時に情報処理できる能力があれば、「出来事」の理解が可能なものかもしれないが、少なくとも筆者には不可能であった。録画された映像を改めて見ることによって、園児たちの間でいくつもの「トラブル」が並行して生じていることに驚かされる。その上、園児たちはその「トラブル」をやり過しており、他者を巻き込むような大きな問題には移行させてはいない。他者を巻き込むほどの規模のものは、Sくんが大泣きした件の「トラブル」である。

さて、表4-2をもとに、一人の男児はなぜ泣くに至ったのかという先ほどの問いに答えてみたい。直接的な契機は、TくんがSくんの両足をつかんだからということになろうか(表4-2, 11:33:00-30②)。Tくんによる行為によつ